

第Ⅲ部第一章

尼崎の地理・地形

第一節〈入門編〉

『尼崎市史』にみる 尼崎の地理・地形



航空写真や地図から、土地形成の歴史を読み取ることができる。右の写真は『尼崎市史』第一巻口絵に「市内東北部園田地区にみられる条里遺構の空中写真」と題して掲載された、昭和三十六年撮影の航空写真。園田地区榎堂・田能から豊中・伊丹市域にかけての猪名川流域が写っている。

一、『尼崎市史』が描く尼崎平野形成史

『西宮市史』から『尼崎市史』へ 昭和四十一年（一九六六）刊行の『尼崎市史』第一巻第一章「尼崎平野の形成」のおもな執筆者は、地質学の専門家である藤田和夫氏と、歴史地理学の渡辺久雄氏です。両氏は『西宮市史』第一巻（一九五九）においても、地理分野を担当していました。

地理・自然・環境分野を叙述する『西宮市史』第一巻第一章～第三章は、藤田氏・渡辺氏をはじめ当時の大阪市立大学に籍を置く新進気鋭の研究者たちが大学をあげて執筆を分担し、このちの自治体史における地理・自然原稿のモデルとなるすぐれた成果をあげました。なかでも藤田氏が担当した地質学の分野は、高度経済成長初期にあたるこの時期に各地で行なわれていた造成工事の現場を確認し、地上に露出する地質構造を検証・分析して執筆されたもので、この時代の学門水準をリードする研究として高い評価を受けました。市史第一巻は、この『西宮市史』に引き続いて執筆・刊行されました。

第一節・第二節―地理的性格と地質構造― 市史第一巻第一章は、三つの節から構成されています。

第一節「尼崎をめぐる自然」は、市域を形成する尼崎平野を大阪平野の西翼、大阪盆地（大阪平野と大阪湾を一体的にとらえる地理区分）の一部と位置付け、同時に西の武庫川・六甲山地、北の六甲山地北限線延長線、東の猪名川・千里丘陵に囲まれる武庫平地の前縁にあたり、六甲山地と海が近接する武庫川以西とは性格が異なるとします。そのうえで、昭和三十九年に国土地理

院が実施した測量調査結果をもとに都市開発が進む以前の原地形復元を試み（市史第一巻図3）、市域は海拔五メートルの境界線により伊丹段丘と区分され、川の流れや旧河道が多い平野部と結論付けます。

続く第二節「尼崎近傍の地質構成」は、重力異常の検出（同前付図2）及びボーリング調査結果の解析（図8～13地質柱状図、図14バネルダイアグラム）をもとに、基盤構造、その上部の地層構造、断層の位置などを分析します。伊丹断層の南、大阪盆地最北部にあたる市域の地下は、表層から順に沖積粘土層、伊丹礫層、伊丹粘土層が層をなして傾斜しています。その構造・地質構成の分析から、海進・海退及び地殻変動による地層形成メカニズムを考察しています。

第三節―尼崎平野形成史の試み― 第二節の考察をもとに尼崎平野形成史の叙述を試みたのが、第三節「尼崎周縁地域の地形発達史」です。筆者藤田氏は節の冒頭において、「まだまだ資料不足」であり「かなり大胆な推論」「誤りは将来の改訂をまつ」としています。

事実、この第三節が描く尼崎平野形成史は、その後の田中眞吾氏らの研究により、大幅に修正されることになります。この点は後述することとし、ここでは第三節の内容を要約して紹介します。

まず、尼崎平野を考察するうえで、大阪盆地最深部の基盤岩類及び、その上部の被覆層のうち第三紀中新世に形成される神戸層群についての言及は不要であるとして、第三紀鮮新世末（約百万年前）から最新世（洪積世）にかけて形成される大阪層群から上の地層を叙述の対象と位置付けます。そのうえで、六甲山から尼崎平野にかけての模式地質断面図（図19）を示し、その形成史を次のように解説していきます。

尼崎平野が位置する大阪盆地の地下の大部分は大阪層群が占めており、その上部に洪積層と沖積層が層をなし、全体が盆地中央部に向かってゆるやかに傾斜しています。傾斜の原因は大阪盆地沈降と六甲山の隆起で、これにより六甲山の花崗岩体と尼崎平野の間に平行するいくつもの大規模な衝上断層が生じ、断層間に位置する高位段丘・中位段丘（山麓扇状地等）・低位段丘（伊丹段丘）が武庫平地を構成します。

次に、洪積層・沖積層の形成過程についてです。まず約三万年前の海進期に尼崎平野は海底となり、伊丹粘土層が堆積します。続いて約二万年前、ビュルム氷期最盛期の海退により大阪湾が完全に陸地化し、伊丹礫層が堆積するとともに古猪名川・古武庫川が川底を浸食し、平行して六甲山地の上昇と大阪湾の沈降が続くため礫層は南へと傾斜します。やがてビュルム氷期が終わり、やや温暖な後氷期に入ると、一般に縄文海進と呼ばれる海進が始まり海面が上昇します。洪積世最末期の上昇停滞期（約一万年前）、尼崎平野最上層をなす沖積層の下部が形成され、その後は急激な海面上昇（筆者の藤田氏はこれを尼崎海進と命名）により、約五千年前まで表層に泥質の沖積層が堆積します。

この海進のちに海水面の低下があったと考えられ、これにともない土砂流量が多い武庫川が河口部に突出する三角洲を形成し、この三角洲の土砂が大阪湾の西風波浪と時計回りの沿岸流によって東に吹き流され砂州を作り、現尼崎平野の土地を形成していきます。周囲に対してやや高く、水害の懸念が相対的に少ない砂州列上は集落適地となり、歴史時代に入ると市域東部では砂州列間の低湿地に猪名荘をはじめとする荘園開発が進められます。そういった様子が、縄文時代・

弥生時代・古墳時代・奈良時代という四区分の海岸線推定図（図22・23）により示されます。なお、この第三節の記述を受け継ぐ形で、第三章「古代の尼崎」の第三節一「尼崎地方の地形の変遷」が古代後期から中世にかけての土地形成史を記述しています。

市史第一巻第一章の評価 このように市史第一巻第一章は、この時代の地理学の水準に立ち、当時得られる知見の範囲で大胆な推論を行ない、尼崎平野形成史をはじめ科学的に叙述した画期的な著作でした。

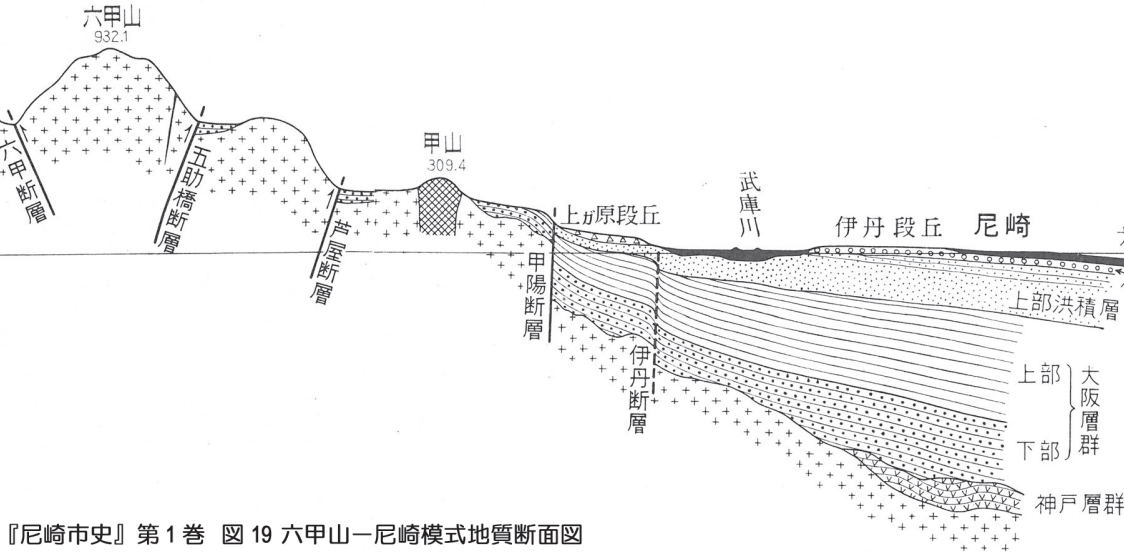
しかしながらその一方で、利用可能なボーリング調査の本数・深度とも限られていたのに加えて、地層面を単純に三段にわけける当時の理論の範囲内にとどまっており、地下構造を詳細に分析してその形成メカニズムに迫る、というアプローチをとることができませんでした。また表層地形については、複合的な情報をもとに堆積・形成過程を分析するという視点そのものが地質学の分野で確立されておらず、推測をもとにした概略的な記述にとどまらざるを得ませんでした。

二、『尼崎市史』以降の研究

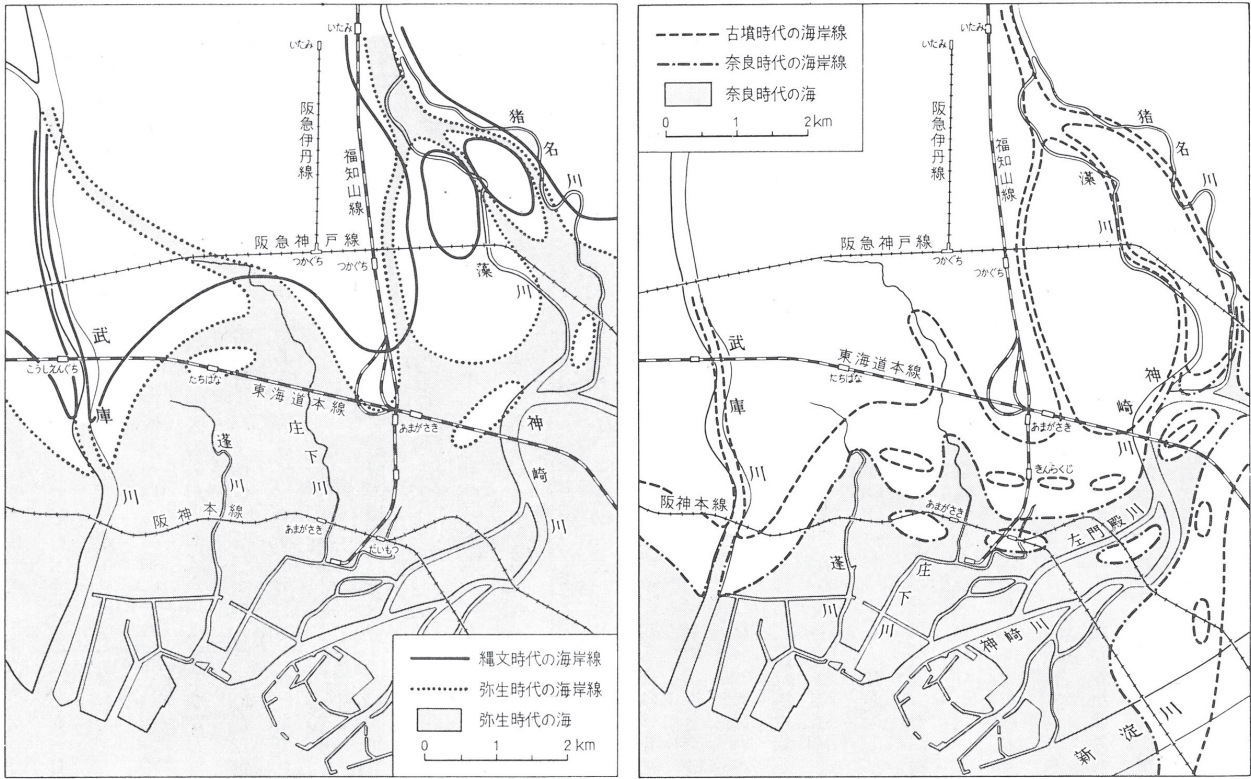
市史第一巻後の地理研究の進展について、昭和四六年に創刊し、現在まで地域研究史料館が刊行を続けている『地域史研究』掲載論考を中心にみていきます。

本項末尾に、『地域史研究』掲載の地理及び地名研究論文等一覧を掲載しました。地理の分野は、地下の地質構造に関する研究と、表層部分の地理を扱う歴史地理分野の研究にわかれます。

地下の地質構造に関する研究 前者のうち、とくに市史第一巻の叙述を大きく修正するのが、田中眞吾氏



『尼崎市史』第1巻 図19 六甲山－尼崎模式地質断面図



『尼崎市史』第1巻 図22 縄文・弥生時代古地理図 図23 古墳・奈良時代古地理図

らによる第二四巻第二号・第三〇巻第三号掲載論文です。利用したボーリング調査は豊中・伊丹・尼崎市域（一部は大阪市域）にわたり、市史第一巻当時と比べて調査数が多く深度も深くなっています。これらの調査データを利用した結果、市史第一巻が大阪盆地中心に向かってなだらかに傾斜しているとした市域地下に、田中氏は多段の段丘面を見出しました。

いなみの大地の研究から

伊丹台地周辺の研究に先立って、『加古川市史』^⑤執筆のため「いなみの台地」を調査した田中氏らは、ここでも連続する多数の段丘を確認し、さらに気候変動と大地の隆起現象からその形成を説明する理論的検討を行いました。田中氏はその後『小野市史』『御津町史』『姫路市史』『三田市史』『揖保川町史』といった自治体史の地理を担当し、これらの成果をふまえて著書『兵庫の地理』において、兵庫県南部の段丘形成メカニズムを解説しています。そこで同書に沿って、その理論を要約紹介してみましよう。

前提となるのが、地球上の気候は約二・一万年周期で温暖化（海

進）と寒冷化（海退）を繰り返すというミランコビッチ天文学説^⑧と、播州地方の大地の約百万年間にわたる傾動隆起現象です。東が隆起し西が沈降する傾動現象の速度を、田中氏は千年間に西明石で二五センチ隆起、加古川市日岡で二二五センチ隆起、御津町・揖保川町で七・二センチ沈降と計算しています。

この結果、次のような現象が生じます。

まず海進時には、波が軟らかく侵蝕されやすい大阪層群を削り、海沿いに海食崖という崖を形成しながら内陸側へ移り、波の下は平らに削られて波食台と呼ばれる地形と、それに続く低地になります。その後、海退が起こり海岸線が海側へと遠のき、約二・一万年後ふたたび海進が起こりますが、隆起する場所では以前の海食崖と波食台はすでに波が到達しない高さとなっており、その手前に新たに海食崖と波食台、それに続く低地が形成されます。これが数万年から数十万年にわたって繰り返された結果、多段の段丘地形が形成されるというのが、田中氏らが提唱する研究結果です。

伊丹台地南縁から尼崎低地への適用

田中氏らは、『地域史研究』第三〇巻第三号掲載論文において、伊丹台地南半から尼崎低地の地表に四段、地下に七段以上の段丘の存在を指摘します。この段丘地形は、地殻変動による地層全体のゆるやかな傾斜という市史第一巻が描いたメカニズムでは説明できず、田中氏は東播磨と同じく一定周期で生じる気候変動と一貫した大地の隆起により説明できると結論付けます。また地層と海水面変化曲線を対照した結果、伊丹粘土層は市史第一巻が想定した約三千年前ではなく一三千年前をピークとする大海進により堆積し、その後の二・一万年周期の海進・海退により伊丹礫層が堆積して七段

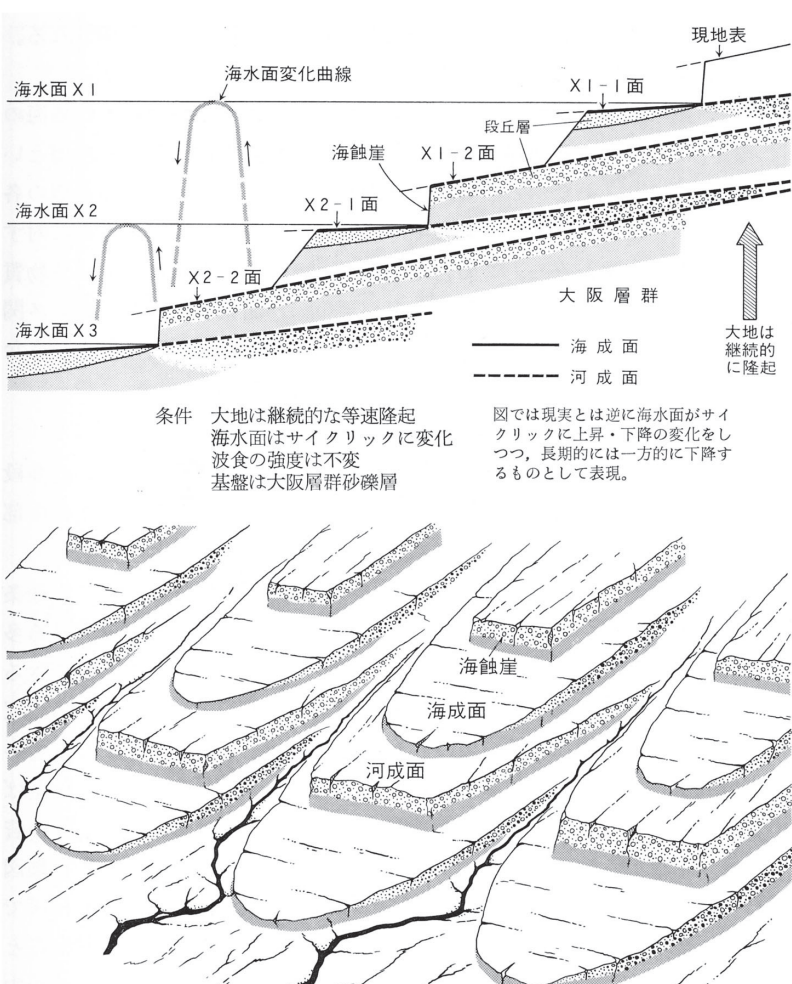
以上の段丘地形が形成され、隆起速度は千年間に約二八・六センチと計算しています。

なお、市史第一巻が大阪盆地の地形形成要因として重視する六甲山の急激な隆起現象についても、田中氏は前述の『兵庫の地理』において「六甲山地」という項目を立て、理由をあげて疑問を呈しています。

歴史地理分野の研究

表層の地形を対象に、主として歴史時代以降を考察する歴史地理の分野でも、いくつもの注目に値する研究成果が生まれました。

古代条里制をめぐる^⑨は、落合重信氏による兵庫県下の研究を概観した批判論文の^⑨のち、八木哲浩氏が天



『加古川市史』第4巻 図12 いなみの台地の地形形成 (上=模式ダイアグラム、下=同スケッチ)

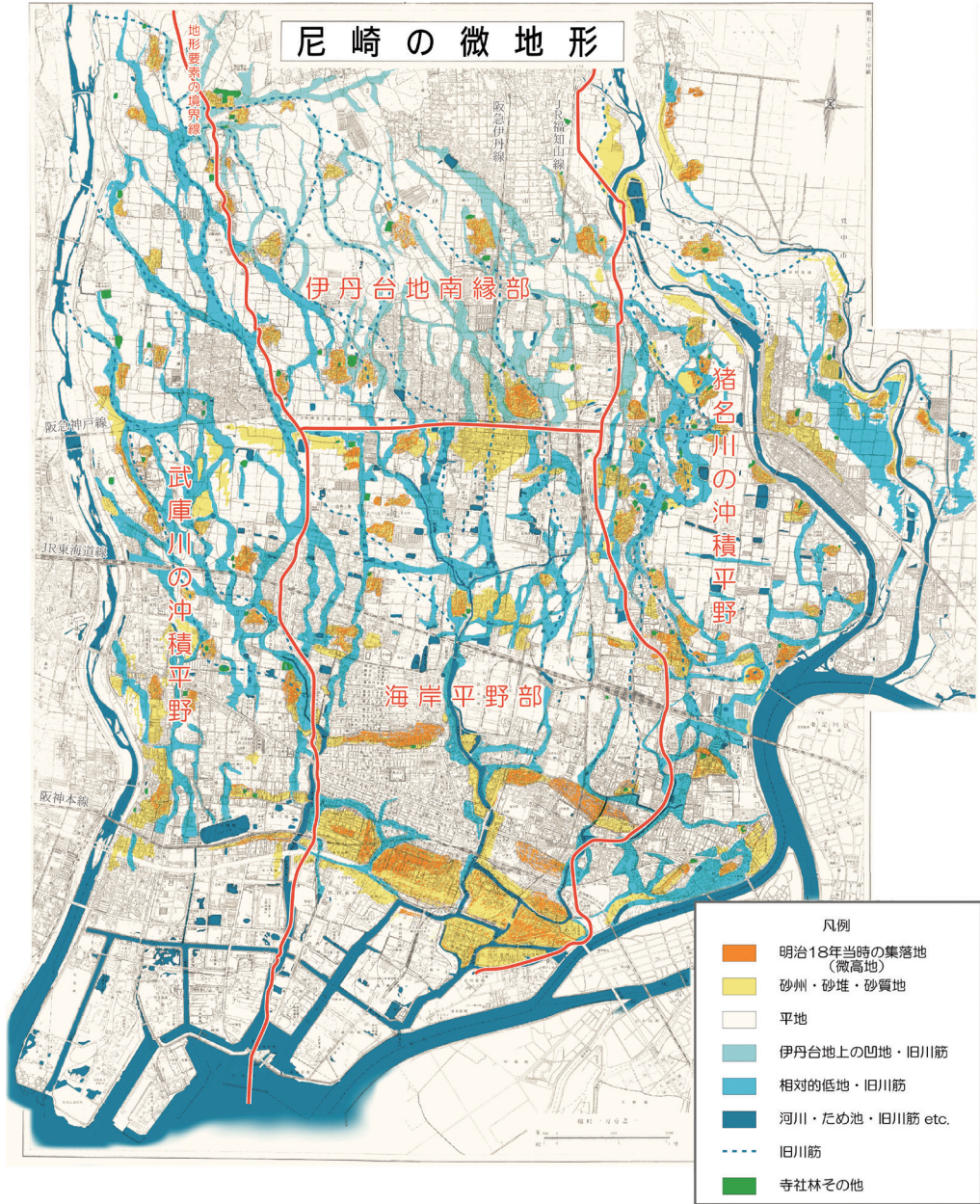
一一一号掲載の黒田慶一論文です。上町台地の原形である長柄砂州が淀川河口部まで北に伸びていたとする従来説を批判し、大阪平野形成における淀川デルタの優位性を指摘しています。同号掲載の藤本誉博論文もまた、文献史学に依拠しながら考古学の成果を大胆に取り入れ、中世尼崎町の形成過程と寺社などの空間配置を時代別に描き

出しており、尼崎地域を対象とする歴史地理研究のひとつの到達点を示したものとええます（本章第三節「実践編」1「中世都市尼崎の景観復元」参照）。

街道研究の分野の成果としては、第二二巻第二号掲載の木村万亀子論文と、第一五巻第二号掲載の渡辺久雄論文^⑪があります。とくに木村論文は、近世の街道ルートを街区レベルで現代の地図上に復元したもので、これ以降の歴史街道調査や探索の取り組みにおいてつねに参照される基本文献となりました。なおこの分野では、平成二〇年（二〇〇八）八月に『阪神間の街道』第一号を発行した「阪神間の街道を歩く会」が、その後毎年一〜二号のペースで同誌の刊行を続けています。各号において中国街道・西国街道・津門^⑫の古道といった街道を取りあげ、地図や史料を駆使して考察し、ときには従来のルート比定説に対する批判を提起するなど、注目すべき成果を生み出しつつあります。

近代の分野では、第二四巻第一号掲載の辻川敦・吉田かおる論文、第三〇巻第二号掲載の松井美枝論文、第三九巻第二号掲載の香山明子論文が、いずれも地図・絵図研究と聞き取り調査・フィールドワークを重ね合わせることで、住宅地化や人々の生活史、景観といった都市尼崎の諸相を描き出しています。

『地域史研究』以外では、元市立尼崎高等学校教員で尼崎郷土史研究会代表も務めた西本珠夫氏の環濠集落研究^⑬が、昭和三〇年代以来の調査成果をもとにしており、都市化が進む以前の集落景観の記録として貴重です。また、井上眞理子氏が富松・出屋敷・道意町・初島など市内各所での聞き取り調査をもとに描いた数々の原風景マップ^⑭は、人々の記憶に残る風景の記録化という意味で注目すべき成果といえるでしょう。



『図説尼崎の歴史』序説2「尼崎市域の微地形」掲載図版

三、「新尼崎市史」

地理分野における新たな研究成果 平成八年に刊行した『尼崎地域史事典』は、地質・地理分野三六項目を掲載しました（地名項目を除く）。記述はおおむね市

史第一巻に沿っており、新たな知見を盛り込んだといえる内容ではありませんでした。

最新の成果を反映したのが、平成一九年刊行の『図説尼崎の歴史』です。文書・絵画・建造物等歴史研究で用いられる資料の多くは、その時代の地表で繰り広げられた人々の営みを語るものです。考古学は、現地

微地形図の作製方法

戦時中の航空写真 『図説尼崎の歴史』序説2「尼崎市域の微地形」に掲載された微地形図は、大阪市役所が撮影を計画し、委託を受けた民間会社が昭和一七年に撮影した航空写真の解析結果にもとづいて作製されています。この航空写真は、当時の大阪市が防空計画や重要企画立案審議の資料とするため、大阪市域全域に近郊地域を加えて撮影したものです。

昭和一七年当時は、国土防衛上の見地から航空写真の撮影が原則として禁じられていたため、現在のように民間の会社が自由に撮影した航空写真は存在しません。このため、この大阪市所蔵の写真群はきわめて貴重な写真史料であり、昭和三年に同じく大阪市域と近郊を撮影した写真群とともに、平成一二年度に大阪市指定文化財に指定されています。

撮影された写真ネガは一八×二四センチメートル、八十分の一の縮尺で、大阪近郊のうち阪神地域では、現尼崎市域から西は現西宮市域の平野部、北は現伊丹市域から川西市域・宝塚市域の平野部までをカバーしています。写真は隣のコマと六〇パーセント重複（オーバーラップ）するように撮影されており、市域にかかる写真は一三六コマに及びます。この写真から微地形を読み取って図を作製した田中眞吾氏は、市域を写した写真画像上には大規模な地形変化がほぼ見られず、開発前の自然地形をある程度示すものと考えてよい、と評価しています。

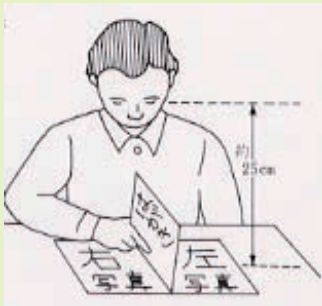
微地形を読み取る 微地形図の作成にあたっては、互いにオーバーラップして連続撮影された一对（二枚一組）の航空写真を実体視して、地形の凹凸を読み取

ります。実体視（または立体視）とは、地図作成用に撮影された航空写真のうち、同一コース内の隣り合う画像を並べ、互いに重複する部分を使って立体的な画像を見ることがです。

左に掲載した図のように、両目でそれぞれの画像を見る練習をすると、立体的な画像が見えてきます。田中氏によれば、八十分の一の写真により、地表の〇・五メートル程度の凹凸を読みとることが可能であるということです。こういった正確な読みとりができるようになるためには、ある程度のトレーニングが必要です。

実体視用の機器と練習方法 ただ、そこまで読み取れなくとも、地表面から数メートル高い集落の家屋の屋根や、木立の立体感は見えてきます。また、実体視を行なうための光学機械としてステレオスコープ（実体鏡・立体鏡）が市販されており、これを利用すれば実体視はさらに容易になります。

一般財団法人日本地図センター公式ウェブサイトのなかの「地図博士の部屋」ページには、実体視の解説に加えて、練習ページやサンプル写真の紹介があります。実体視に挑戦したい方は、こういったサイトを利用して練習してみてください。



実体視の練習
日本地図センター公式ウェブサイト中、「地図博士の部屋」より

表の地下に眠る歴史を明らかにしますが、それも各時代の地表といえるでしょう。歴史は、地下構造も合わせた地形に規定されているところが少なくありません。そこで『図説』では、序説として「尼崎の歴史の舞台」を設け、市史第一巻以降の成果を叙述しました。特に市史第一巻以降、田中眞吾氏らによって大きく修正された地下構造の研究については、1「縄文海進前の尼崎の地下」において、約六千年前に進行的な縄文海進以前に形成された段丘地形の形成過程が叙述されています。市史第一巻以降の成果がコンパクトにまとめられ、叙述の中心は現尼崎市域ですが、伊丹台地の形成過程にふれていることから、伊丹市域との違いも理解することができます。市域の地形の基礎知識を得るうえで、必読文献といえます。

2「尼崎市域の微地形」では、市域の地形区分は（1）伊丹台地南縁部、（2-1）武庫川の沖積平野、（2-2）猪名川の沖積平野、（3）中央部分南部の海岸平野、（4）武庫川・猪名川の下流部の三角州により構成されていることを明らかにし、それぞれの特徴について叙述しています。

海岸線は気候変化により、上昇・下降を繰り返します。高海面となる温暖期には内陸側、市域では北側に上昇し、海面が低下する寒冷期には後退、市域では南側に下降します。この海岸線に上昇・下降の過程で形成される砂州の特徴も叙述されています。

これらが明らかになったのは、大阪市役所が撮影を計画し、委託を受けた民間会社が昭和一七年に撮影した現尼崎市域の航空写真が残っていたからです。縮尺八十分の一と大スケールで、立体視することで地表の〇・五メートル程度の凹凸も読み取ることが可能で

す。地形を細かく判読することで、戦後の大規模開発前の自然地形を把握することができます。

市史第一巻では、こういった航空写真を活用した微地形復元を行なっておらず、そのため地下構造と同じく、表層地形についても「おそろく」「らしい」「ようである」といった慎重な言い回しを用いた、推論による叙述が多くなっています。これに対して『図説』では、航空写真から砂州・水系・氾濫原・自然堤防等の微地形を判読し、最新の成果が叙述されることになりました。

沖積平野形成過程の特徴 『図説』は、土砂が堆積してできる沖積平野の形成過程を述べ、沖積平野上の河道間、河道沿いに形成された砂州・砂堆・自然堤防の特徴を明らかにしました。それは次のような点です。（1）伊丹台地南縁部は、約一二〜一三万年前以降、地下段丘の下端部分で、約二万年前に形成されたものです。伊丹台地は、北摂山地の南麓から南へ舌状に延び、東に高く西に低く傾く形で隆起していることが特徴です。これを傾動隆起といいます。

傾動隆起によって東側は台地の最高所となり、河川も水勢を失っていったことから灌漑用水を得がたい地域となりましたが、西側は武庫川の沖積平野と重なるため、武庫川から取水することができました。

伊丹台地の傾動隆起によって武庫川は、流路を南東から次第に南方向へと変え、流路沿いでは段丘化が進みました。猪名川は隆起した台地を浸食し、やはり段丘地形を形成していきました。そして、両河川の土砂が堆積した沖積平野や氾濫原が形成されました。

（2-1）武庫川の沖積平野には、河道が網目状に走り、氾濫原上には砂州・砂堆、流路沿いに自然堤防が形成

されました。大きな出水の度に河道は変わり、砂州・砂堆のなかには、のちの河川により自然堤防が分断されたものもあります。

（2－2）猪名川の沖積平野では、猪名川・藻川もがわの自然堤防上や、網状の流路の間にできた砂州・砂堆に、近世の集落が立地しています。

（3）中央部分南部の海岸平野には、現在の海岸線にほぼ並行した状態で砂州列が確認できます。この砂州列にも集落が広がっています。

『図説』で明らかにされた微地形は、集落・用水路の立地、洪水の原因を考えるうえで、大きな示唆を与えてくれます。考古学・文献史学・地理学の協業の必要性を教えてくれる成果となりました。

市域最南部の海岸側には、近世期、積極的に新田が開発されました。しかし、どのように干拓かいたくし、潮気が混じる土地を耕地としたのか、よくわかっていません。残念ながら『図説』でも、それを明らかにできませんでした。また明治後期以降、これらの地域は工場群に生まれ変わり、早い時期に原地形は失われました。（4）武庫川・猪名川の下流部の三角州の叙述ができなかったのも、そのためです。そこで、コラム「近代の干拓技術」では、他地域の研究成果を叙述し、今後の市域海岸部の研究の進展を期待しました。これは大阪湾岸の海岸部新田の成立を考えるうえで、重要な課題として残されています。

地形を読み解くことは、歴史研究にとって重要な課題です。その進展に、文献史学も十分に貢献できるように。市域を往還した人々の日記類の記述や行程、街道の配置、新旧尼崎城・寺社の立地・建設過程や水害記録などに、わずかではありますが手がかりが残さ

れています。これらを丹念に読み、資料を蓄積することが、当面は必要だと思われます。

四、地名研究

『**尼崎市史**』『**地域史研究**』『**尼崎市史**』は、第一巻「はじめに」において「尼崎」という地名にふれるほか、歴史叙述のなかで地名由来や伝承に言及するケースはあるものの、地名研究そのものを論じた巻はありません。ただ、昭和四十九年発行の『**尼崎市史**』第一〇巻は第五章「**尼崎の小さな名**」を設け、市域大字おおあざと明治初年以降の小子こあざを記録し、さらに付図「**尼崎市小子図**」を添付しています。また、近世史料により明治初年に統合される以前の字が判明する大字については、第五章に近世の字も掲載しています。

その後、『**地域史研究**』第一巻第一号で渡辺久雄氏が地名「**尼崎**」の由来を詳述したのち、兵庫県の地名研究の第一人者である落合重信氏が「地名からみた**尼崎地域**」を第一巻第三号・第二巻第三号・第七巻第二号に連載したことで、**尼崎**地域の地名研究は本格的にその第一歩を踏み出しました。また、第九巻第三号には**地域研究史料館編集**・作成による「**尼崎市域地名の史料上の初見**」を掲載し、市史第一〇巻と合わせて地名研究の基礎データ整理・公開に努めました。

『**尼崎の地名**』『**尼崎地域史事典**』こういった基礎データ公開の決定版として、**地域研究史料館**が昭和六〇年に刊行したのが『**尼崎の地名**』です。第一章「地名の変遷」に地名の前提となる土地支配制度の歴史を概説し、第二章「**尼崎の地名**」では市域の大字・小子を概観したうえで、近代の小子一、六二二を地形地名・

誌編）には、自治体の現況と沿革、大字・町名等の行政地名の概況を記録しています。

平凡社発行『**日本歴史地名大系**』の第二九巻「**兵庫県**の地名」Ⅰ・Ⅱは平成一一年に刊行され、市域地名はⅠに収録されています。同書もまた古代の国・郡・郷、中世の荘園、近世の町村、近代の行政区域、自然地名や遺跡、交通・産業、文化といった多様な分野の地名を収録し、それぞれの歴史を詳述しています。

二種類の地名辞典は、いずれも市域の歴史的地名を調べることできる基本文献といえます。加えて兵庫県地名研究会編『**兵庫県小字名集**」Ⅰ～Ⅴが、平成三〓八年に神文書院から刊行されました。市域を含む摂津編のみ未刊でしたが、書名を「神戸・阪神間小字名集」と変え、神戸史学会創立五〇周年記念刊行物として刊行される予定です。

その後の地名研究　最後に、こういった各基本文献を活用した、おもな地名研究の成果を紹介します。

『**地域史研究**』誌上では、『**尼崎の地名**』刊行前後、**尼崎歴史研究会**が第一一巻第二号・第一三巻第一号・第一七巻第三号に「**友行村の小字名**」に始まる一連の論考を発表しました。いずれも荘園絵図や村方文書といった文献史料調査と現地調査を重ね合わせた実証的な内容です。また、第二巻第二号には、**地域研究史料館**による地名研究のガイダンスを掲載しました。

他誌に掲載されたものとしては、白石健二氏が『**歴史と神戸**』に連載した「**尼崎のさりげない地名**」^{〔1〕}が、駅名と住居表示の相関関係、交差点・橋・踏切名称の分析といった、従来の研究が取りあげてこなかった近代地名を考察するユニークな論考となっています。地名に関連するサブカルチャー研究も生まれていま

す。**尼崎**出身・在住の人気漫画家・**尼子騷兵衛氏**作の『**落第忍者乱太郎**』及びアニメ化作品『**忍たま乱太郎**』

において、登場人物名と地名に**尼崎**の地名が多く使われていることから、ファンによる現地訪問（いわゆる「**聖地巡礼**」）が平成二〇年頃から目立つようになりました。この現象に着目した西田隆政氏のレポートが、**甲南女子大学**の紀要等に発表されています。^{〔18〕}

〔注〕

（1）段丘とは海・川沿いの階段状地形を指す。過去の水面が形成した平面が隆起した台地状の土地で、市史第一巻当時は地殻変動が形成主因とされていた。現在は、本項「二、『**尼崎市史**』以降の研究」に紹介する気候変動を主要因とする学説が提唱されている。

（2）海面上昇や陸地沈降による海岸線の陸側への移動を「海進」、反対の現象を「海退」と呼ぶ。気候温暖化による海水熱膨張と大陸上氷床融解により海水面が上昇し海進となり、寒冷化すると海退となる。地球規模の周期的気候変動により、数万年ないし十万年単位の長期サイクルで温暖化（海進）と寒冷化（海退）が繰り返されていると考えられている。

（3）市史第一巻の第三紀に関する記述は同書編集当時の知見にもとづいており、現在の学説とは合わない部分がある。同書は大阪層群の形成開始を第三紀鮮新世末Ⅱ約百万年前とするが、現在は鮮新世末（第四紀との境界）は約一八〇万年前または二六〇万年前と考えられている。また後掲注（7）書において田中眞吾氏は、大阪層群の堆積時期を鮮新世末ではなく初期（二百万年前）から第四紀更新世（市史第一巻がいう最新世、三〇万年前）にかけてであるとしている。なお現在の地質学においては、第三紀という用語そのものが

農耕地名・歴史的地名・植物地名など計一四種類に分類し、分布を細かく図示してその立地を分析しています。渡辺久雄氏の執筆になる第一章・第二章は、**尼崎**地域の地名研究のみならず、地名研究一般の入門・概説書としても非常に有意義な内容となっています。

第三章は市域全大字を概説し、資料篇には大字・小子一覧及び大字別の小子図、町名改正・住居表示等の経過一覧を掲載、巻末には地名索引を付しています。

また平成八年発行の『**尼崎地域史事典**』は、古代・海浜地名一八、**尼崎**城下の町名など城下地名一三、市域の全大字八二（新田・枝村を含む）からなる計一三の地名項目の立項しています。可能な限り、各地名の史料上の初見及び推測される地名由来を解説し、城下各町及び大字については、領知関係・石高・家数人数・寺社・所在する遺跡・近代以降の行政区域変遷といった基礎的データを統一的に記載しています。

加えて同書は、**尼崎町**・市や合併村などの近代行政単位、遺跡や荘園、河川・道路・橋梁といった広義の地名も立項しており、市域の多様な地名を網羅的に調べることができる文献となっています。

民間発行の地名辞典類　**尼崎市**が『**尼崎の地名**』と『**尼崎地域史事典**』を刊行した時期、民間出版社二社が、全国を網羅した県単位の地名辞典を刊行しました。

そのひとつ、角川書店発行『**角川日本地名大辞典**』の28「**兵庫県**」は、昭和六三年に刊行されました。〈総説〉〈地名編〉〈地誌編〉〈資料篇〉の四部門から構成され、〈地名編〉には国・郡・郷や荘園等の古代・中世地名、近世の町村、近現代の県・郡・市町村・大字・町名、山・川・海等の自然地名、街道・道路・橋・港・公園・寺社・史跡といった人文地名を収録しています。また〈地

非公式用語とされている。

（4）断面面上側岩盤が、下側に対して四五度以下のゆるやかな角度でずり上がる逆断層をいう。

（5）『**加古川市史**』第一巻第一章（一九八九、第四巻一一九九六）

（6）神戸市西部から稲美町・三木市・加古川市などに広がる台地。周辺河川より数十メートル高く、古来ため池が多く造られたことで知られている。

（7）田中眞吾著『**兵庫の地理**　地形でよむ大地の歴史」（神戸新聞総合出版センター、二〇〇七）

（8）セルビアの天文学者ミルティン・ミランコビッチ提唱の気候変動学説。地球軌道の周期的変化により日射量が変化し、一〇万年及び二・一万年周期の気候変動が生じ、温暖化と寒冷化を繰り返すとする。

（9）落合重信「兵庫県下の条里制遺構について―その古代史究明のために―」（『**兵庫県**の歴史」第四号、兵庫県、一九七〇・一一）

（10）八木哲浩「近世村絵図からみた摂津川辺郡条里」（『**市史研究紀要**たからづか』創刊号、宝塚市教育委員会、一九八四・一二）

（11）本論文は、渡辺久雄氏が**尼崎**を対象とする自身の歴史地理論文を集成した『**尼崎の歴史地理選集**』（個人出版、一九八六）にも収録されている。

（12）西本珠夫「**尼崎**の環濠集落―その痕跡をたずねて―」（『**大阪春秋**』第五八号、大阪春秋社、一九八九・一〇）、同「**尼崎**の環濠集落」（『みちしるべ』第三二八号、**尼崎郷土史研究会**、二〇〇八・三）

（13）**尼**いもクラブ企画・編集『**尼**いもの本』第一巻絶滅編（**尼崎**ひと・まち・赤とんぼセンター、二〇〇二）掲載・井上眞理子画・**尼崎**臨海部原風景マップ（四枚）、井上眞理子「中世の富松城跡と原風景マップ」「玄

番堀と闇市のドブ川―新三和商店街の原風景―（聞き書きありし日のまちと暮らし6・7、『歴史と神戸』第三三六号・第三三七号、神戸史学会、二〇〇三・二、二〇〇三・四）、同『わたしのノスタルジック尼崎』（改訂版、個人出版、二〇〇八）掲載「昭和30年代を歩く出屋敷MAP」等

(14) 近世の基本支配単位である自然集落の村を指す。

近代町村制以降は行政村と区別して大字と称した。

(15) 近世以前においては土地一筆ごとの名称が「字」であった。明治初年の地租改正の際、複数の字を統合して新たな字を編成し、さらに近代町村制以降は大字と区別して小字と称した。

(16) のちに落合重信『地名研究のすすめ』（国書刊行会、一九八二）に収録

(17) 白石健二「尼崎のさりげない地名」(一)〜(三)（神戸史学会『歴史と神戸』第二二四号・第二二六号・第二二三号、一九九九・六、一九九九・一〇、二〇〇〇・一一）

(18) 西田隆政「『落第忍者乱太郎』における尼崎の地名による命名―尼崎の「聖地」化―の要因について」（『甲南女子大学研究紀要』第四九号文学・文化編、二〇一三・三）、同『落第忍者乱太郎』の「聖地」尼崎をめぐる「再び『落第忍者乱太郎』の「聖地」尼崎をめぐる―尼崎市とフアンの関係性とは―」（女子学研究会編『女子学研究』Vol.3・4、二〇一三・三、二〇一四・三）

（執筆者）岩城 卓二（「新尼崎市史」）／地域研究史料館（担当）辻川敦、三及び「微地形図の作製方法」以外のすべて／中村光夫「微地形図の作製方法」

尼崎市立地域研究史料館紀要『地域史研究』 掲載尼崎関係歴史地理論文・史料等一覧

地下の地層構造に関する研究

失われた尼崎の森の歴史―最終間氷期以降の大阪湾北岸の植生史― 前田保夫 第二一卷第二号
猪名川下流部低地の地形と地下構造
田中眞吾・白井哲之 第二四巻第二号
伊丹台地南縁の地表・地下の段丘地形
田中眞吾・井上茂・辻村紀子 第三〇巻第三号

歴史地理

条里遺構の解釈をめぐって 渡辺久雄 第二巻第三号
長洲から尼崎まで―土地進展の歴史地理―
渡辺久雄 第四巻第二号
尼崎付近における盛土と堤防―低地開発の歴史地理―
渡辺久雄 第六巻第一号

神社立地の歴史地理学的検討の試み―尼崎市域の神社予備調査を実施して― 渡辺久雄 第八巻第三号
中国街道の踏査 木村万亀子 第一二巻第二号
中世の尼崎付近の交通路―神崎より尼崎への発展―
渡辺久雄 第一五巻第二号

地理・地形を調べる（シリーズ地域の歴史を調べる2）

地域研究史料館 第二二巻第三号
武庫地区の農業と住宅地化―地理・地形の影響―

辻川敦・吉田かおる 第二四巻第一号
回想の中の水辺空間―尼崎市南東部における川と人との関わり― 松井美枝 第三〇巻第二号
東大寺領猪名庄の位置とミヤケ開発

浅岡俊夫 第三一卷第一号

猪名庄荘図からみた古代地図の表現―図的表現に関する覚書― 浅岡俊夫 第三一卷第三号

大尼崎が描かれた鳥瞰図 香山明子 第三九巻第二号
中世都市尼崎の空間構造 藤本誉博 第一一一号
難波「八十嶋」と神崎川・猪名川下流域

黒田慶一 第一一一号

地名研究

「尼崎」という地名の起源 渡辺久雄 第一巻第一号
地名からみた尼崎地域 同（続） 同（続々） 落合重信 第一巻第三号・第二巻第三号・第七巻第二号

尼崎市域地名の史料上の初見

地域研究史料館 第九巻第三号

友行村の小字名 尼崎歴史研究会 第一一卷第二号
椎堂村の小字名 尼崎歴史研究会 第一三巻第一号
東大寺領猪名庄絵図の地名について―絵図の現地比定を試みて― 尼崎歴史研究会 第一七巻第三号
地名を調べる（シリーズ地域の歴史を調べる1）
地域研究史料館 第二二巻第二号